
Peewee 外伝集

斉河 燈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P e e w e e 外伝集

【Nコード】

N 2 8 6 9 P

【作者名】

斉河 燈

【あらすじ】

P e e w e e のスパインアウト短編集ですが、それぞれ単品でもお読み頂けます。天才優男デザイナー×うぶなアシスタントのピュア恋『歌い鳥、囁く』『忘れ花、咲く』『星祭り、雨宿り』。俺様眼鏡×かけだしカメラマンの強引ラブ『次点の憂鬱』、等。（サイトからの移設版）

歌い鳥、囀く

——ペットボトルでも持つて乗れば良かったなあ。

恐ろしいほど乾燥した地下鉄内で、私はまた少し背中を丸める。
喉が痛い。

新年初の会社日、予定は会議だけだから重いものなんてひとつも入っていないのに、帆布のトートバッグは鉄アレイみたいにずしりと肩にくる。これは罪悪感の重さだろうか。

「……けほ」

乾いた咳をひとつ零すと、すぐ前に立っていたサラリーマンが迷惑そうに顔を背けた。申し訳なさがバッグの中でさらに膨れ上がる。重い。重すぎる。

風邪を引いたくらいで仕事始めから欠席するのはどうかと思ったけれど——病気のときに閉じこもるのは、あれ、自分のためだけになくて他人様のためだったりする？ よね。

いつだってそういう肝心なことになかなか気付けない、暢気な自分に嫌気がさしてしまう。

ごめんなさい。どうか皆さん、降車後に手荒いうがいを徹底なさってください。

脳内でクロスを切ってそう懺悔する私は、本宮いつか（もとみやいつか）、二十七歳。小さなデザイン事務所に勤める、アシスタントデザイナーとは仮の姿。現在は風邪の病原体を飛散して回る質の悪い生物兵器なのだ。

「げほっ……」

喉の奥からせり上がってくるような酷い咳。苦しい。どうして政府はこういう、ウィルスのるつぽに加湿器設置を義務付けないのだろつ。手荒いうがいのでCMをするより、よっぽど効果がありそうなのに。

思わず上半身を屈めると、ふいに、背中に温かいものが触れた。優しく肩甲骨の間を過ぎては戻るそれが、背中をさすってくれてくれるのだと気付いて、首だけで振り返る。

つり革にゆるりと手首を引っかけている、大学生風の男性とばかり目が合った。

大丈夫？ とでも言いたげに、心配そうに歪んだ瞳。微熱の影響か、元来の暢気さからか、綺麗だなあと真っ先に思った。

茶褐色の虹彩は私のものより断然大きくて、お正月休みに姉の子供が携えていたブライスの人形を彷彿とさせる。けれど残念なことに彼も私と同じようなマスクをしていたから、その下の容貌まではうかがえなかった。

「す、みませ……ごぼつ」

申し訳なささと苦しさでもう一段階折り曲げた背を、彼は無言でさすってくれる。そのうえ、持参ののだ飴まで分けてくれるという稀に見る親切ぶりに、向いの席のおばさま集団からは感嘆の声が漏れ聞こえて来た。

お礼を言いたいけれど、言えそうにない。今、声を発したら、せっかくおさまった咳のスイッチがまた入ってしまいそうで。

数分考えた結果、私は携帯電話のメール画面に文字を打ち込み、それを読んでもらおうと思いついた。

《ありがとうございます。助かりました》

不躰だろうか。躊躇しつつも画面を彼に見せると、

《いいえ。風邪ですか？ お大事に》

ご丁寧にそんな文章を打ち込んでから、返してくれた。やっぱり親切だ。じんわりと胸の奥があたたかくなったのは、氣遣わしい文章をもらったからじゃない。

彼の両目が、優しく細められていたことこそ最大の理由。透き通った瞳は、細めると涼しげな雰囲気が凝縮されて煌めきが増すみたいだった。

《おにいさんもですか？ 最近流行ってますよね、風邪》

《そうみたいだね。インフルエンザじゃなくて、良かったと言うべきか否か》

《そうですね。咳だけで十分辛いですよね》

細いけれど節のある、男性の指。短く切りそろえられた清潔感のある爪。見慣れない手が自分の携帯電話を弄っている様が不思議で、鼓動は、いつになく駆け足。

《大学生ですか？》

《そんなに若く見えるんだ。君より年上だと思うけど》

《うそ！》

《本当。ただし、君が見た目より老けていなければ、の話》

《うーん、私、二十七ですけど》

《じゃ、僕のほうがみつつ年上だ》

小さな画面を介しての奇妙なやりとりは、私が下車するまでの間、四駅分続いた。時間にすると、十五分程度。いつもなら退屈な通勤時間はあつけないほど短すぎて——ほんの一分の、たかが十五回分、

としか感じられなかった。

その間に私は、彼が『神保』という名前であること、社会人であること、毎日この電車で通勤しているということを知ったのだった。別れ際、また明日も同じ時間場所で、と約束を交わしたのは特別な感情からじゃあない。きちんとしたお礼をしようと思ったから、なのだけれど。

ともあれ、これが、はじまり。

最寄りの駅から徒歩十分の雑居ビル。三階の角にオフィスをかまえる私の勤務先は、小野原デザイン事務所、という。

大通りから一本裏道にそれた立地のせいか、交通の便はいいのに割に静かな環境。そんなところが凄く気に入っていて、採用されてから今日まで皆勤賞の私。

うるさいのは苦手だ。カラオケだとか飲み会だとか、賑やかなのも正直、遠慮したいくらい。ついでに言えば派手なものも嫌いだし、奇抜っていうガラでもない。もちろん、可愛すぎるのもちよつと。

だから、いつも無難。ファッションも、インテリアも——アイデアも。

こんな地味で突出したところのない自分に、デザイナーとしての資質なんてあるはずもないのだと気付いたのは、最近のこと。

「そうね、決めたわ」

会議室に並んだコンセプトボードの前を行ったり来たりしていた先生は、ぴたりと足を止めてこちらを振り返る。長い髪がさらりとシルクみたいに翻って、フローラルの香りが漂った。香水じゃなくてシャンプーなのだと思うけれど、先生が纏えばなんだって、セクシーの象徴みたいになる。

先生——小野原惟さん、二十九歳。おのらはら・ゆい

細い体に、ナチュラルメイクでも映えるはつきりとした顔かたちにもかわらず男顔負けの仕事をこなす彼女は、敏腕デザイナーであり事務所の代表、つまり私の雇い主なのだ。

「今回は杳のアイデアでいきましょう。プレゼンは金曜、それまでにサンプル作成とデザインの詰めをお願いね」

ああ、やっぱりね。

抜擢されて歓喜の声を上げる同僚の隣、私はやはり今回もクロコの役に決定で、主人公の座には何年かかっても届きそうになかった。もともと野心も目標も持ち合わせていないから、このままでいいやと、諦めてはいるけれど。

だって、デザイナーになれただけで快挙だ。……なんて、そこそ凡人らしい思考なのかもしれないと思うと、少し、虚しい。かといって二十代も半ばを越えて身の丈を知らないなんてありえない。

私は、言ってみれば先生みたいに綺麗でも、細くもない、不格好でありふれた、つまらない器。そこに詰め込まれているのは、平凡、凡庸、平均点——。

普通が一番難しいのよ、って口癖のように母は言うけれど、私はいつも何かが足りないと感じていた。何かが欠けていることに、気付いていた。

それが埋めようのないものだ、ってことにも。

だって私の中身はもう、つまらないものでいっぱいだから。

「あ、あと、追加連絡なんだけど」

私には到底似合わないような珊瑚色の爪で、先生は手帳を捲る。同じ女なのに、別の生き物みたいだ。憧れはするけれど、真似はしない。このうえ自分の分際を忘れたら、私はもっと彼らから遠ざか

る。そんな気がするから。

影でいい。それでも光の側にしようとするのは、生物の習性だろうか。それとも、未練がましいだけ？

「次の仕事のアイデアを、各自来週末までに提出して頂戴」

もう次の仕事ですかあ、と今回の主役が発言する。私には、台詞なんてない場面。

「ええもちろん。今年もガンガン行くわよ。内容はこれね」

「わ、大手メーカーのチョコレートじゃないですか」

「そ。パッケージのリニューアルなの。各自最低でも十種は制作すること。いいわね」

エネルギーの塊みたいのに、先生は力強く采配を振るう。ここにいられるだけで幸運だと思うのは事実。そして疑問に思うのも、また、事実。

私の『平凡』はきつと、生まれる前から始まっていた。

父は商社に勤めるサラリーマン、母はたまにスーパーでレジ打ちのパートをする主婦。彼らが私の誕生に備えて用意したものは、ほとんどが黄色だった。よくある話だ。男女、どちらが生まれても良いようにピンクでもブルーでもない、中間色を選ぶという、あれ。

その名残か、以来、私が身につけるものは常に黄色だった。疑問には思わなかったし、反発することもなかった。ただ、受け入れるように身につけていた色。

それは徐々に、内側にまで染み込んで——染み付いたのだ。

女の子らしくも、ボーイッシュでもない。良くも悪くもない。可

も不可もない。

無難な、私の、はじまり。

「ねえねえ、いつちゃん聞いた？」

デスクに向かって印刷の上がりをチェックしていると、パーティーションの向こうから同僚が私を呼んだ。いつちゃん、それが私の、ここでのあだ名。クロコには分不相応な、役の名前。光栄だ。

「何を？」

「今度のあのチョコレートのパッケージ、競合が人望舎なんだって勝てたら快挙だって先生が言ってた」

「ジンボウシャ、って」

「知らないの!？」

驚きのあまり、ひっくり返りそうな声を発して杓は立ち上がる。

本当にひっくり返ったのは、彼の椅子だったのだけれど。

そんなに驚くことだろうか。

「人望舎、デザイナーの神保克之^{じんぼ・かつゆき}が率いる日本屈指のデザイン事務所だよ」

そう言っただけで彼が差し出した雑誌の切り抜きには、見覚えのある顔がでかでかと掲載されていた。ううん、本当に覚えがあるのは顔全体じゃなくて両の目に、だったのだけれど。

「ああ！」

今朝の、『神保』さん！

スポットライトの形状がはつきりわかるほど綺麗に映り込んだ、

水鏡みたいな瞳。見間違えるはずがない。彼だ。

「実は今朝、親切にしてもらったんだけど……」

「へえ。すっごい偶然」

「だよねえ」

マスクに阻まれてうかがい知ることの出来なかった下半分は、想像以上に細面。目元だけでなく全体を総合的に見たほうが、さらに幼い印象が増すみたいだ。

私よりみつつ年上、ということは三十歳なのだろうけれど、思い切って多めに見積もっても二十五くらいにしか見えない。余計な手を加えていない潔い黒髪と、飾り気のないファッションもそこに一役かっている。

それにしてもこれは、何と言うか。

「カッコいいよねえ、神保さん。同性でも見蕩れるよ」

先を越されて、うんと頷くしかなくなる。風邪薬という一種の麻醉にやられた私の脳内にも、全く同じ単語が浮かんでいた。

彼の容姿は二枚目俳優にも引けを取らないほど充分整っていて、有り体に言えば……美形。そのうえ親切で才能まであるなんて、まさに非の打ちどころがない。

彼はきつと、先生と同じ種類の人間なのだ。綺麗な器に、必要なものが必要なだけ、センスよく盛られているような。

つまらない容れ物にありきたりのものが無造作に詰め込まれている私とは、違う。きつと——欠けている所なんか、ないはず。

「でも、噂によると今回が最後の仕事になるらしいんだよね、神保さん」

「えっ、嘘」

最後？ どうして。

焦って声を上げると、先を競うようにして咳が飛び出した。

「げほっ」

「大丈夫？ もう今日は早退したら？」

「う、ううん。それより」

それより最後の仕事ってどういうこと。

言わんとしていることに気付いたのか、彼は心配そうに眉をひそめたまま答えた。

「引退するらしいんだよ」

「い、いん……ごほっ、な、なんでっ」

デザイナーに引退なんてあるのだろうか。そんなの、聞いたことがない。

それに、だって、まだ三十歳だよ？ 誌面での扱いを見るに仕事がないとは思えないし、むしろ引く手あまただろうに。

「ごめん、詳しくは知らないんだ。先生は知ってるみたいだけど……なにせよ、大物の最後の作品になるわけだから、強敵なんだよ」

翌日、三十九度なる大熱を表示した体温計にため息をひとつ吹きかけ、私は人生初の欠勤を決めた。仕方がない。今日出社したところで、仕事にはならないだろうから。

心配そうにりんごを剥いてくれる母の目を盗み、ここぞとばかりにベッドの中で携帯電話に齧りつく。もちろん、彼について調べる

ためだ。

神保克之——キーワードを打ち込むと、すぐに何千件というヒットがあった。流石、とでもいうべきだろうか。

得られた情報はというと、彼が「美大在学中に『人望舎』を設立したこと、紙媒体のみならず映像も手がけるクリエイターだということ。そして自由で独特ながら温かくユーモア溢れた表現が、日本のレイモン・サヴィニャックと称されていることだった。

サヴィニャックといえば、ペリエのポスターだろう。やや抽象的で個性的な表現は、どこか親しみがあつて日本でも人気が高い。もちろん、私も大好き。

検索に引っかけた児童書の装丁を眺めると、『サヴィニャック』という評価にもすんなり頷けた。全体は澄んだイメージなのに表現はぬくもりに満ちていて、ひたすらやさしい。神保さんそのものみたい。柔らかくてあつたかい作品たち。

もっと、もっとと沢山、見てみたい。彼の世界に触れたい。

貪るように画像を検索し、目に焼き付けた。

けれど、その引退に関する記述は半日調べても見つからなくて、日が沈む頃、とろとろまどろみながら夢と現実の狭間で彼の笑顔を思った。

（もしかしてデマなんじゃないのかなあ。……うん。そうだと、いいのにな……）

睡眠をたっぷりとったおかげか、翌朝の体温計に表示されていたのは三十六度二分と至って平熱。こうして、すっきりした頭で地下鉄に乗り込んだ私は、一日ぶりに彼と再会したのだった。

《神保さんって、下の名前、克之さんですよね？》

《……バレたか。もしかして業界人なのかな、本宮さんも》

《はい、正解です。しがないアシスタントですけど》

《しがなくなてないでしょう。仲間は大切だよ。仕事なんて、ひとりじゃできないんだから》

《優しすぎますよ、神保さん》

《よく言われる。優柔不断だって》

《そういう意味じゃないです。……いつもそんなふうなんですか》

《そんなふう、って？》

——誰にでも、こんなふうに優しいんですか。

続く言葉を、打ち込む勇氣はない。

再会から一週間、私たちは毎朝八時の電車内で落ち合っては、こんなふうに携帯電話の画面を使って会話をすることが恒例になっていた。

おはようございます、と会釈をすると必ず笑顔で返してくれる神保さん。日を重ねることに私の中で、その視線に感じる戸惑いは増していく。

しかし私の顔からマスクが消えても、彼は一度としてそれを外そうとはしなかった。風邪にしては、長い。そう、違和感を持つていたのに。私はまだ、彼が何を背負っているのか、気付いてはいなかったのだ。

こんなに、近くにいたのに。

「……いつちゃん？」

背後から声を掛けられて振り返ると、そこには偶然にも先生が乗り合わせていた。

「あ、おはようございます」

「おはようじゃないわよ、一体どういこと」

険しい顔をして髪をかきあげた様子を見、思わず背筋が伸びる。怒ってる？ どうして。

彼女はそのままの表情で、正面から神保さんを瞳の中心に捉える。

「あなた、人望舎の神保さんですよ。うちのアシスタントに何のご用が？」

問われても、彼は困ったように目線を泳がせるだけで反論をするでもない。はつとして、同時に青ざめた。

「言い訳もしないの？ 疑いたくはないけど、疑わざるを得ない状況ね」

情報をリークしたのではないか、と言いたいのだろう。

そうだ、次の仕事、私たちはライバルなのだ。考えの甘さを、気付きの遅さを、ずばり指摘されたみたいだった。どうして私はいつもこう、重要な場面で配慮を欠いてしまうのか——いつもどこか、足りないのか。

次の駅で無理矢理ホームへと連れ出された私は、必死で弁解を試みるしかなかった。

「神保さんは何も知らないんです。私が、先生のアシスタントだったことも、まだ。だから」

「……そう。今回だけは信じてもいいわ。ただし、これからは気をつけることね」

「こ、これから？」

「当たり前でしょ。自覚なさい。いくら個人的なつきあいとはいえ、彼は競合相手なのよ」

そんな。

「だ、だけど、私、情報なんて漏らしません。ただ、」

ただ、彼の側にいたいだけ。

縋るように訴えた私を見下ろし、先生は肺の中を空っぽにするくらい大きく息を吐く。

「……それで、世間はどうかしら？」

「えっ」

「言ってみればこれは、神保克之の引退試合なのよ。どちらが勝つたにせよ、少しでも黒い噂がたったら最後の作品に泥がつく。困るのは彼女だわ」

こくりと喉が鳴った。食道が、詰まるほど狭くなっている。情けないことに、私はその瞬間まで彼が引退するということをすっかり失念してしまっていたのだ。

また、また——欠けている。欠けてばかり。

「意地悪で言っているわけじゃないのよ。わかってちょうだい。本当に彼を思うなら、せめてこの案件が片付くまで……春までは距離を置くべきよ」

春。とてつもなく、遠い場所にあるような気がする。けれどそれが神保さんのためになるなら。

わかつているのに、咄嗟には頷けない。切なすぎて……息苦しくて。

錆びたみたいに固い首。それでもどうにか縦に振ろうとしたときだった。

声が、喧噪の向こうから、私たちの間に投げ込まれたのは。

「——ん！」

独特の抑揚と滑舌に、もとみやさん、と呼ばれたのだと理解する

まで数秒。

それが神保さんの口から発せられたもので、彼が反対のホームにいるのだと気付くまで、さらに数秒かかって。

「じん、ぼ、さん……？」

なんだろう、この、既視感。

同じような場面を、昔、どこかで見たような。そうだ。あれは確か……手話を。

手話を、取り扱ったドラマだった。

（まさか）

驚きに目を見開く。

こうして私はようやく、彼の耳が正常に機能していないことを悟ったのだった。

人目につかないように、との先生の配慮で私たちは個室のカフェに場所を移した。テーブルの上にはそれぞれ、可愛いアートが施されたカプチーノが手付けずの状態で放置されている。

彼は慣れた手つきで胸ポケットからメモ帳を取り出し、そこにペンを走らせる。一行目には、すみませんと初めて見る筆跡で殴り書かれた。

《本宮さんに非はありません。彼女を責めないでください》

こんな時でも神保さんは私のことを優先して気遣ってくれる。いっそわあっと声を上げて、子供みたいに泣いてしまいたかった。

（どうしてそんなに優しいんですか）

俯いた私の視界に割り込むようにして、手招きをした彼は、続け

てメモ帳に綴り始める。一年ほど前に、悲運な事故で聴力のほとんどを失ったこと。周囲とのコミュニケーションに、困難を感じていること。もう、今の仕事を辞めてしまおうと思っていることを。

敷き詰めるように羅列される文字。刺みたいだ。胸が、痛い。

先生は納得がいかない様子で、手帳に何やら書き込むと彼に向けてそつと置いた。

《私たちの仕事は言語に頼らない表現をすることでは？ 引退なんて、どうして》

答えて、神保さんが文章を綴る。

《僕は自分の作品に、この障害に対する加点を与えられたくはない》
《加点？》

《同情とか、共感とか、そんなもので評価されたくないんです》

それは、先生が言うところの『世間はどう思うか』に該当する部分なのだろう。

悲運——いちど知れ渡れば、彼はそのラベルなしに表現をすることはできない。きっと、二度と。例えば評論家が正当に評価しても、一般的には難しい。それは私にも予想できる。

今はまだ世間に認知されずにいるけれど、いつまで隠し通せるかは疑問だ。

「だけど、わ、私」

私は神保さんの作品が好きです。言いかけたところで、先生がボールペンを貸してくれた。

《これからも神保さんの作品が見たいです》

好き、とは書けなかった。今の私には、何故だかとても難しい単語のように感じられて。

《ごめんね、無理だよ。僕はもう、欠けてしまったから》

何が、だろう。理解できなかった。だって、本当に欠けているのは私のほう。彼には必要なものが全部揃っているとしたら。

《嫌です》

嫌です——なんて陳腐で安易でありきたりな言葉。咄嗟に気の利いたことが言えない私は、どれだけつまらない人間だろう。それでもしがみつくようにペンを握った。それしか出来なかった。

《辞めないでください。お願いします。神保さんの作品、待ってる人、きつと沢山います》

けれど返って来たのは、ありがとう、という優しく悲しい諦めの言葉で。

《いい子だね、本宮さん》

そんなことを言わないでほしかった。

どうか萎れた顔をしないで。諦めてしまわないで。伝えきれない気持ちは、綴る前に涙と一緒に、テーブルの上へと滴り落ちる。

どうしたら引き止められるだろう。彼をもう一度、舞台上上げられるだろう。

だって、こんなの。

こんなの、欠けている人間は夢を見るな、って言われているみた

いだ。

確かに私には目標も野心もなかった。もう夢は叶ったと思っていたから。だけど。

「……だけど」

あなたの目には、その先が映っているはず。

彼の耳に順調に届いていないことは予想できたけれど、言葉は雪崩みたいに押し寄せて来て、唇の堰を越えた。

「神保さんは私とは違う。か、欠けてるのは私だけで」

「いっちゃん……」

珊瑚色のピカピカの爪。特別な、選ばれた人のそれが平凡でちっぽけな私の手を包み込むように触れる。

「あなたはちゃんと、ぜんぶ持ってます。ぜんぶ、持ってます……」
「っ」

「いっちゃん、落ち着いて」

落ち着けるはずがなかった。涙の向こうにいる彼は、ボールペンを握んだままの体勢でこちらを見ている。あなたは今でも、私にとって完璧だ。

完璧だ。なのにどうして。
どうして。

「ひ、評価がそんなに大事ですか。頼りにしてくれるクライアントさんより、表現することそのものより、ま、待っていてくれるひとより、……大事なことなんですかっ」

悔しさと齒痒さで、一気にまくしたてた。メール画面のほうがつと、上手に言葉をまとめられたと思う。しかし、天下の神保克之に勢い余って説教をしていることにも気付かなかったのは、元来の性質の問題ではなかった。

それだけ、伝えたい気持ちが強かったから。

思えば私は過去、これだけ強い感情を、何かに込めようとしたことなどなかった。仕事にも、言葉にも。

涙をぐいぐい拭って、その上さらに溢れ出したものは放置して、ペンをかまえた。

メディアで取り上げられるような『選ばれた特別な者』に必ず訪れる、奮起すべきとき。そんなものが平凡な私にもあるのなら、きっと、今だと思った。

《そんなに評価が大切なら、評価で私と勝負してください》

《どんな？》

《今度のパッケージ、もし神保さんじゃなくて私の作品が採用されたら、引退を撤回してください》

先生が「はあっ!？」裏返った声を発して、口元を押さえる。無理もない。無茶を言っていることは承知の上だ。こんな大博打、ラスベガスでも打てない。

それでも私は、彼が世の中にとって特別な存在であることをどうにかして伝えたかった。

《わかった》

神保さんはそれだけを書いてすぐにメモ帳を閉じると、コーヒー代を置き、マスクで顔の半分を覆ってから店を出て行った。あれが彼を外界から守る鎧だったのだと、気付いたのはそのとき。

どうすんのよ、と独語のように漏らした先生を横目に見、私はた

だ、両の手をテーブルの上で握りしめた。

翌日から、出勤時間を一時間早めた。仕事に集中したかったこともあるけれど、神保さんと出くわさないように、というのが本当のところだった。

八時の約束を復活させるのは、春が来てからだ。
例えばそのとき彼が、もう、そこにいなくても。

「全部だめね。まずはコンセプトをしっかり決めなさい。そこが基本よ」

「はい！」

週末の締め切りに向けて、朝に晩に、しつこく作品を提出しては批評を貰った。だめ、と言われることには慣れているから、大丈夫へこたれたりなんてしない。

そんなふうになんて強気でいられるのも、私が愚か者で考えが足りなくて、資質に欠けていて——ゆえに、怖いもの知らずだからなのかもしれない。

毎日、電車の中では資料を読みあさり、帰宅してから仕事に没頭して、やがて私はどこへ行ってもチヨコレートの棚しか目に入らなくなっていた。そうしてようやく思い知ったのだ。

皆がこれまで、どんなふうに住事と向き合っていたのか。どれだけ表現しようとしていたのか。どれだけ伝えようとしていたのかを。

「た、ただいまあ」

「おかえりー。ふふふ、いいものがあるわよー」

週も半ばを過ぎた木曜日、二十二時を過ぎて帰宅した私を待っていたのは、母が押し入れの奥から引っ張り出した古めかしいアルバムだった。角がめくれ上がっているうえに、ページが貼り付いていて、若干、古文書の様相。捲ると、ばりっという小気味良い音とともに幼い日の自分が姿を現した。

「うわ、懐かしい！」

予想通り、どの写真もカナリア色の私。

「でしょ。いつかは黄色、つぐみは桃色」

「……え？」

ツグミはお姉ちゃんの名前だ。今はもう、結婚して家を出て、一児の母なのだけれど。

「あら、話さなかったつけ。いつかが産まれるとき、お姉ちゃんのお下がりじゃ可哀想だから、って混ざらないように全部別の色で揃えたのよ」

なにそれ。

「せ、性別がわからなかったからじゃなくて？」

「やあねえ、わかってたわよ。それで、わざわざいつか用に準備したの」

「わたし用に？ とくべつ、に？」

「あたりまえでしょ」

知らなかった……。

女らしくも、ボーイッシュでもない、平凡で無難な私。ありふれた、その他大勢の私。

それがとても『特別な平凡』だったのだと気付いた瞬間、迷っていたいろんなことに、答えが見えた気がした。

「ありがと、お母さん！」

「え、ちよ、いつか、夕飯は」

「仕事、終わったらちゃんとたべる！」

ソファーを乗り越えて、同時に自分の中のくだらない思い込みの柵も飛び越える。

部屋に駆け込んで、Macの電源といっしょに根性のスイッチも押した。今ならきつと、出来る。だって、伝えたいことが溢れてくる。

化学変化みたいに、私の中身が組み変わっていくみたいだった。そうだ。私が足りないと思っていたものは、すでにここにあったのだ。ただ、本当の形を知らなかっただけ。変化する時を待っていただけ。

誰かの、熱によって。

マウスを握ったまま朝を迎えて、カーテンを開くと、スポットライトみたいな光が新しい私に差し込んだ。

そうして、翌週――。

事務所内で上がったアイデアを選び抜いてから、メーカーに持ち込みにいった先生を、私は事務所のデスクで待っていた。いつも通り、印刷の上がりを地道にチェックしつつ。

最終的な採用が決まるのはまだ先のことだろうけれど、とりあえず今日の第一段階で淘汰されれば、これでおしまいだ。一見穏やか

だけれど、行われているのは食うか食われるかという、熾烈な生き残りの競争なわけで。

「戻ったわよー」

ご帰還とともに響いた声。転がり出そうな勢いで玄関に走った私の頭を、先生は優しく撫でてくれる。その顔が笑えていないのを見て、この時ばかりは素早く察知してしまった。終わりを。

「駄目、だつたんですね」

「……ごめんね、うちのアイデアは全滅。流石に人望舎は強かったわ」

「そう、ですか」

わかっていたことだ。無謀だって。それでもこんなに悔しいのは、……欠けているくせに夢を見てしまったから？

「……っ」

「いっちゃん……」

「ふ、……うう……っ」

ぬぐつてもぬぐつても、悔し涙は枯れない。察したのか、他の皆は作業机に向かったまま見ないふりをしてきている。

私はやはり、選ばれた人間にはなれなくて。でも、それを認めることに、これまでで一番強い反発を覚えた。クロコのままでもいいとは思えなかった。

「う……っ」

「泣かないで、いっちゃん」

仕立てのいいスーツに、情けなく濡れた顔を引き寄せて、抱きしめてくれる先生。そうして声をひそめ、めそめそしてるといういいものあげないわよ、と言った。

「え……？」

桜色に塗り替えられた艶っぽい指先が、こっそりと小さな紙切れを差し出している。

受け取って広げると、そこには見覚えのある筆跡で

《次回も負けないよ》

と、力強いメッセージが記されていた。

隅に添えられているのは、携帯電話のメールアドレスだろうか。

「先生、これ……！」

「見ればわかるでしょ、神保さんからよ。言っとくけど、皆には内緒だからね」

わかつたら行きなさい、と背を押してくれる手。特別な、選ばれた人の手。それはもうひとつの神器と思しきモノを私に差し出している。人望舎、と書かれた空の透明ファイルだ。

「え、あの」

行け、って言われてもどこへ？

「これね、間違えて持って来ちゃったのよ。だから返却して来てくれる？ 人望舎に、直接」

「そ、そんな」

まだ春じゃないのに、逢ってもいいんですか。確かに、彼は引退を撤回したわけだから状況は変わったけれど——だけど。

逡巡する私を前に、先生はジャケットを羽みたいに広げて脱ぎながら、ふふと笑った。

「私、さっき聞いちゃったのよ」

「何を、ですか」

「ウグイス。あれ、別名を春告鳥はるつづじって言うのよね」

聞くや否や、飛び立つ勢いで駆け出した。

嘯いたのは小鳥か風か、それとも先生か——都合のいいことに思慮の足らない私には、わからない。だけど、コートもジャケットも羽織り忘れた私はそれこそ、一足も二足も早い春の装いだっただろう。それでも寒さなんて感じなかった。

駅まで辿り着くのも待てず、前方不注意で自転車と接触しそうになりながらメールを打った。

《神保さん、今、どこにいますか？ 本宮》

《ああ、本宮さん。メールありがとう。どこって、僕ならいま事務所だけ》

《どうやって行ったらいいですか》

《えっ！？ 来るの？ ここに？》

《あの、わたし、届け物が》

そこまで打って、すぐに打ち直した。

《神保さんに、逢いたいです》

唇より素直に、言葉を紡ぎたかった。だってこれは、彼の『耳』にまっすぐ届くから。

そうだ、最初から私たちは、私たちの間には、意思の疎通に不便なんてなかった。あなたの言葉は私に、私の言葉はあなたに、きちんと届いていたから。

《うん、僕も。僕も、君に逢いたい》

返信は、続けざまにもう一通。開封しながら、スタートを切るように、駅の改札をくぐる。

《オフィスなら本宮さんがいつも降りる駅の、ふたつ先だから気をつけておいで。駅まで迎えにいくよ》

《ありがとうございます。ところで……あの、この間は偉そうなことを言っちゃってすみませんでした》

《いや、ありがとう。お陰で初心を思い出したっていうか、うん、目が覚めたみたいだった》

《ごめんなさい。それ、本当ならいいんですけど》

《本当本当。だから仕事、続けようと思えたんだし》

《良かった。嬉しいです。これから神保さんの作品が見られることもだけど、私、やっと目標が出来たから》

《目標？ 凄いね》

《はい。いつか――》

私は囁く。

《神保さんに勝ちたいんです。必ず、参った！って言わせてみせますから。ふふふ》

あなたの耳に。

《それは頼もしいね。と、言いたいところだけど》

《だけど?》

《もう参ってるよ》

《お世辞いわないでくださいっ、私、まだまだだって自分でわかってますから》

《いや、そっちの意味じゃなくて》

《じゃあどいう意味なんですか。もうっ、からかってるなら怒りますよ!》

《あの、むしろ本気なんだけど》

《? 本気で怒らせたいつてことですか》

《だから違うつて。僕はもうこういうの、縁がない人間だっと思っ
てたから……、だから、あっという間に参ったつていうか》

《えと、何が言いたいのかわからないんですけど》

《いいよ、まだわからなくて》

《えー。いまいち歯切れが悪くて、もやもやします》

《僕は悶々としてるけどね……。まあ、これからじっくりとわから
せてあげるから覚悟してて》

《なんか怖い》

《うん。僕も自分が怖い》

初めて降りる駅。嗅ぎ慣れない匂いと人混みの向こう、神保さん
は私をまっすぐに、大きく手を振った。限りなく優しい目をして。
口元からは、規則正しく並んだ歯が一同に外の世界を覗いている。
柔らかい笑顔。胸が詰まるほど、愛しいと思った。

《久しぶり》

左手の中で、震える彼の声。波のように広がって、体の内側で、
ゆっくりこだまする。

《お久しぶりです》

ぎこちなく寄り添って歩き出す、見知らぬ町。流石に冷えはじめた肩をすくめると、神保さんはすかさず自分のジャケットを貸してくれた。

（……やっぱりやさしいんだ）

そこに残っていた熱でまたも化学変化を起こしたのか、私の顔面は徐々に熱を持つ。その副産物だろうか。体中がいつぱいまで満たされたような気になる。足りないところなんて、最初からどこにもなかったような気になる。

だから逆にもし、彼が自らを欠けていると言うのなら——そこを埋めるのが、私であつたらいいのと思った。

一本道。いつになく彼の指先は饒舌で。

一緒ならどこまででも行ける。

……そんな気がしたんだ。

歌い鳥、囁く（うたいどり、うそぶく）fin・

忘れ花、咲う

創造の原動力は何かと問われたら、懐かしさだ、と僕は答えるだろう。

時を経れば、実物の色は褪せる。形状は着実に失われていく。しかしそういった変化とは真逆の道筋を辿るものこそ懐かしさなのだと僕は思う。

一度目にしたものを再び目にする、もしくは心に蘇らせるとき――人は、最初の印象の上に新たな印象を重ね付けする。

同時に、感情のフィルターを被せる。よって、結果的に対象の輪郭は濃くなる。

そうして、より鮮やかに記憶に残す行為。

何度も。何度でも、摩耗する事無くその上書きは続けられる。

毎回。毎回、存在を厚くしながら。ゆえに。

懐かしい、に勝る感情はない。それこそが僕に想像力を与えてくれる。常々、そう考えていた。

神保克之^{じんぼかつゆき}、それは今年三十一になる僕の名でありながら、世間の評価を示すものでもある。

僕は僕の名を忘れたことは無い。

だから世間の評価を、忘れたことも無い。

《もう、やめようと思う。仕事》

最後に二文字を付け足したのは、そう念を押しておかなければ茶化されて、誤摩化されて、なかったことにされそうだったからだ。

僕がペンを置くと同時に、テーブルの向かいにいた城が俯く。そうしてすぐに、今まで見たことのないような切なげな顔で天井を見上げた。

両目が真っ赤に充血している。見なければ良かった、と即刻後悔した。

城 しろ あきなり 秋也は大学時代の同級生で、現在は僕が代表を務めるデザイン事務所“人望舎”の営業担当だ。

学生時代から何かと僕の世話を焼いてくれる、古女房みたいな親友。

《どうしてだよ。連絡ならメールでも十分取れるだろ。今までだってそうだったじゃんか》

斜め右に座していた船橋が、僕のボールペンを奪ってそう殴り書いた。

勢い余って、メモ帳の端から『か』の文字が半分はみ出している。いかにもやりきれない、といったげな感情がそこに表れていた。

船橋 ふなばし ゆずる 譲は僕の後輩だ。

学生時代から何かと突飛な発想をすることで有名だった彼は今、僕の前で企画立案を手掛けてくれている。

城も船橋も、大切な親友だ。戦友とも言える。良い時も悪い時も、なんだって笑い飛ばして側にいてくれた、かけがえのない存在なのだ。

お陰で今の僕がいる。心から感謝している。それゆえにこれ以上気を揉ませることを、僕は簡単に良しとしたくはなかった。

《無理だよ。もうつくれない。創意が湧かないんだ。ごめん》

それだけ書いて、畳の六畳間を出た。萎れきった自分のフォロワーを、もう、彼らにさせたくはなかった。

想像力を失ったデザイナーなんて何の価値もない。

（これで終わりだ。何もかも。終わりにしよう。終わりにするんだ）
仕事部屋に戻って作業途中のモニタに向かうと、ヘッドセットのイヤホンをはめた。オーディオのスイッチを入れ念入りにポリウー
ムを調節し、集中する環境を整える。

どうせ、アイデアなんて湧いて来ない。音だって、聞こえやしないのに。

聴力を失ったのは、一年ほど前のこと。

高校の同窓会の帰り、久々に再会した友人の運転で、自宅へと送ってもらった途中の出来事だった。

交差点に差し掛かったところで、赤信号を無視したトラックに衝突され、車が大破したらしい。

らしい、というのも僕はそのときのことを全くと言っていいほど記憶していないのだ。

ただ、次に気づいたとき僕は病院のベッドの上で、すでに、静寂に近い世界にいた。

訳もわからず、しばらくは放心状態だった。誰に何を告げられても、わからなかった。わかりたくなかった。

事故で失ったのは何も音だけではなかったから、余計にそう思ったのかもしれない。

ハンドルを握っていた懐かしい友人——彼は運転席で車体に潰され、即死したのだ。

やりきれなかった。誰のことも、責められなかった。亡くなった友人の両親にも頭を下げられて、もういいですよと答えるしかなかった。

生きていただけで奇跡だと、主治医に言われたせいもある。

命が、あるだけでも。

確かに、その通りなのだ。

ようやくこれが現実なのだを受け止めたのは、一ヶ月もあとのこと。憤るとか絶望するとか、嘆き悲しむとか、ひととおりの感情を経由した後、僕は未来を案じた。

この先、どう生きたら。どう生きたら良いのか。
わからなかった。

無音の世界は恐ろしい。背後から呼び止められても僕は気付けない。

一方、呼び止めようとするほうは必死で、何とか気付いてもらおうと駆け寄ってくる。そして突如として肩を叩くのだ。

その衝撃は静かな世界にいる僕にとって、存外強い。

心臓が、内からはみ出すほど。萎縮せずにはいられないほど、驚かされる。

些細なことだなんて言わないで欲しい。言うなら経験して欲しい。あんなに恐ろしいことはない。手にしていたものを取り落とすほど怖いのだ。

だから、外で人と会うことが徐々に恐ろしくなった。克服なんて出来る気はしなかった。

あたりまえのことが酷く難しくなった、そんなとき、僕が出逢ったのはどこか懐かしい匂いのする女の子だった。

女の子、というのは正しくないかもしれない。二十代も半ばを過ぎれば、女性と言うべきだろう。

けれど彼女は見るからに余裕がなくて、きよろきよろと忙しく動く瞳はまるで幼い子供のようだ。最初に見かけたとき、咳き込みながら通勤する姿が健気すぎて、手を差し伸べずにはいらなかった。話しかけられるかもしれない、という恐怖よりも、このときばかりは親切心が勝ってしまった。

すると彼女はどうかやら喉が痛むらしく、メール画面でお礼の言葉

をくれたのだ。

これは本当に都合が良かった。耳がはっきり聞こえなくなっ
てから僕は、必然的に言葉を発することも難しくなっていたからだ。

《いつもこの電車ですか？ 今度、きちんとしたお礼をさせてく
ださい》

彼女—— もとみや 本宮さんは律儀にもそう言って、一日置いた翌々

日、本当に手みやげを持参してきた。

飴玉ひとつに対し、紙袋をひとつ。

驚いてしまった。いや、本当に驚いたのはそれを開封してからだ
っただけだ。

キウウリが三本。手製のぬか漬けだった。

買ったものを手渡ししては、僕が逆に恐縮すると思っ
たらしい。小さな氣遣いが、たまらなく嬉しかった。それを早速昼食にいただき
ながら、僕はふと、数年前に亡くした祖母を思い出した。同じ匂い
だったからだ。

祖母はいつも、僕を宝物だと言っていた。克之は克之であれば、
それだけでいいんだよ。

幼い頃から天才だ奇才だと絵の才能を褒めちぎられていた僕にと
って、祖母は心の拠り所だった。

損得も世間の評判も関係なしに、僕の絵を見て素直に喜んでくれ
る、数少ない人間だったともいえる。

今もなお懐かしさの頂点に君臨する、感情の宝庫。とはいえ、そ
れももう、あまり思い出したくはなかった。

僕は僕でなくなってしまったから。祖母が望む僕は、この世に存
在しないから。欠けてしまったから。

耳のことを彼女に伝えなかったのは、タイミングがなかったから

だといいたところだけれど、本当は少し、いや大いに躊躇していたのだと思う。

知られるのは時間の問題だとわかっていてもいたけれど、それでも、一日でも長く、このままでいたかった。

何の前提も、同情も、余計な気を遣わせることもなく対等なコミニケーションをとれる彼女と、共に過ごしたかった。

この先、こんな出会いは二度と訪れないだろうから。

一生、だなんて贅沢は言わない。せめて今だけはと、毎日、祈るように願っていた。

真実が明らかになったその時、本宮さんは泣いた。

子供のように人目も気にせず、ぼろぼろと大粒の涙を流して泣いた。胸が痛かった。船橋や城と同じように、僕の所為で心を痛めているのだとわかったからだ。

しかし同時に、僕は苦心した。彼女が必死で訴えかけてくる言葉を、上手く聞き取ることが出来なかったからだ。酷くもどかしかった。

だから、その涙が同情からではないことに気付いたのは、彼女の挑戦的なメッセージを目にしたときだった。

《そんなに評価が大切なら、評価で私と勝負してください》

何を言っているのだろう、と。

《今度のパッケージ、もし神保さんじゃなくて私の作品が採用されたら、引退を撤回してください》

必死でそう綴る指先はわずかに震えていて、僕は、わかった、と

伝えるのが精一杯だった。

複雑すぎる感情の波に押し流されるようにしてその場を去り、仕事場へと向かった。

彼女の言っていることは無茶苦茶だ。

負けたら仕事に復帰しろと。評価が得られなかったら辞めるなど。普通、真逆じゃないか。勝者こそ、未来を手にするものだろう。

僕は彼女に負かされて、再び夢を追うのか？ おかしくはないか。いや、それがあの子の望みなのか。

例え敗北した僕でも、仕事を続けて欲しいとそう言うのか。

僕が僕であれば、それだけで？

世間の評価など何も関係ない？

忘れかけていた―― 忘れたつもりになっていた感情が飛沫を上げて、一気に噴き出す。

仕事部屋に着くと、倒れ込むようにして床の上に転がり、仰向けに寝返った。

―― 僕はまだ、僕のままだろうか。

あの頃のように。誰かがそのままでもいいよと言ってくれる、僕だったのだろうか。

涙が、こめかみへと伝う。それはあつという間に、聞こえなくなった耳のすぐ横を通り過ぎて畳の上に落ちた。

こんな気持ちになったのは久しぶりだ。

喜びが、苦しい。胸に詰まって、痛い。ああ、懐かしい。懐かしさが、痛い。

もう二度と抱かないだろうと思っていた感情が、僕の中に充満していた。

そうだ。僕は、彼女のことを好きなのだ。

あの子がいてくれたら僕はきつと、果てのない創造が出来る。いつも目新しく、懐かしい日々が循環していく。そう思える。

好きだ。好きだ。好きだ。何度も口に出して、呟いた。そうして僕は咽び泣いた。

もう、過去には戻れない。戻りたくない。彼女に出会えた今を、どの瞬間よりも大切にしたいから。だから。

《自分勝手にごめん。でも、今度の仕事は勝ちにいきたいんだ》

勝って、未来を手にしたいと思った。

あの子の望む、僕になりたいと思った。

《これからも、僕の勝手に付き合ってもらえるかな》

告げると、城も船橋もいつも通り笑い飛ばして。

あんなの、本気にしちゃいねえよ——とありきたりな嘘を言つて僕の背を叩いた。

叩き返した。叩き合いになった。

そのまま暖房の効いた部屋で、小一時間ほど馬鹿騒ぎをした。言葉通り、本当に馬鹿馬鹿しいことしかしなかった。腹がよじれるほどおかしかった。何度か涙がこみ上げて来て、泣いてるだと城にからかわれた。

籠りきつた熱気を逃がそうと窓を開けると、凍えるように澄み渡った冬空。

枯木を揺らして、懐かしい風が吹く。

今度は笑って欲しい。

僕は、君を笑顔にすることが出来るだろうか。僕のまま。

パソコンの電源を入れた。覚えのある起動音が、聞こえたような気がした。

* 忘れ花、 咲う(わすればな、 わらう) f i n
・ *

星祭り、雨宿り

年に一度の逢瀬とくれば七月七日の七夕で、七夕といえば十中八九雨が降ることは言わずと知れた常識だ。

個人的には、夏と言うより梅雨の風物詩だと思う。

今年の七夕——つまり本日も案の定、朝からぐずついた空模様で、雨あしが強まったのは午後四時を過ぎた頃だった。

運動靴を濡らしたくなって商店街に入ったら、眼鏡屋さんの前に笹飾りを見つけた。

湿気で萎れた五色の短冊が気の毒だった。

（今年も織姫と彦星は逢えないだろうな）

この時期の雨は苦手だ。蒸し暑くて、これから訪れる夏をじわじわと予感させる。

真夏に降る雨なら、打ち水よりてきめんに涼がとれるのに。ああ、それはもしかして秋を予感させているからだろうか。

つまり、雨が季節を連れてくるということか。

ふとそんなことを考えて、何かのキャッチコピーみたいだなと思った。

アーケードを抜けたところで湿った夜空に傘を開くと、右のポケットで携帯電話が震えた。

《お仕事お疲れさまです（——）》

本宮さん……いや、いつかちゃんからだ。

彼女とおつきあいを始めてから数週間、デートの回数はまだ片手におさまる程度で、当然のように今日も逢えない。

節句だと言ったって所詮は平日、それも週のご真ん中なのだから仕方がない。

けれど気持ちが通じ合う前は耐えきれた時間が、今は酷く長くて同時に孤独だった。

《いつかちゃんこそ、お疲れさま》

返信をしながら、もしかしたら、この雨は彦星こそが降らせているものかもしれないと思った。

同じ立場だとして、雨が降ったら僕ならきつと、ホツとするだろうから。

長い間離ればなれになっていた挙げ句の、つかの間再会だなんて喜べるのはよほどの楽天主だけだ。

せつかく逢ったところで、再び離れなければならない運命なのだ。それが大前提なのだ。こんな苦痛はない。

僕だったら耐えきれない。

ならば最初から、雨の所為にして不運を嘆く方がよほどいい。

《七夕ですね。雨、やまないかなあ》

間髪を入れず返されたメールを見、僕はもう少し、アーケードの隅に留まる選択をした。

《難しいだろうね。局地的豪雨もあったみたいだけど、大丈夫だった?》

自分たちと織姫、彦星を重ね合わせたらたまらなくなつて、なんとなく、話題を逸らしてしまう。

《はい、うちの方はそんなに土地が低くないので大丈夫です。とこ

ろで神保さん、何かお願いごしました?》

けれど彼女はまだ、七夕について話したいようだった。

《いつかちゃんは?》

《職場でみんなで作ったんです、笹飾り。私は『世界中がしあわせになりますように』って書きました》

《世界中? 難しいなあ》

《やっぱりスケールが大きすぎたでしょうか》

《ううん、そうじゃなくてね。そもそも七夕は、奈良時代から始まったもので、書道やお裁縫なんかの上達を祈るお祭りだから》

《えーっ、知らなかった!》

《僕も、城に聞いて初めて知ったんだ》

《お裁縫、上手になりますようにって書けば良かった……後悔しきりです》

純粹に驚いてくれる様が可愛くて、頬が緩んでしまった。

小野原さんの事務所ではそんなこともするのかと、すこし感心しながら。

《僕なら、無理を承知で『いつかちゃんに逢えますように』って書くかも(笑)》

括弧笑い、は余計だとわかっていながら付け足した。本音だけでなく、真面目に伝えるのは気が引ける。

無理をすれば逢えないことはないと思うからだ。

けれど彼女はとても気を遣うタイプだし、無理をさせるのは申し訳ないと思うから、言い出せない。

まだ付き合い始めたばかりで―― 距離の取り方がわからない。

《そうですねえ、でも私、いつでも神保さんと一緒にいるような気がします。離れてる気、しないんです》

返答に困ってしまった。どういう意味だろう。

《だって私達、側にいても離れていても、同じように話、できるから。これって凄く、幸運だなあって私思っんです》

軒先を伝った雨が、足下の水たまりに落ちて波紋を重ねる。

自転車に乗った雨合羽姿の高校生が、僕を迷惑そうによけていった。

しばらくその画面を見つめたまま、動けなかった。

彼女はこうして、僕の常識をたった一言で覆してくれる。

その度に僕の独占欲は、少しずつ膨れ上がっていく。

彼女は知らないだろうけれど。

《あ、でも、顔が見られないのは淋しかったです、よ？》

付け足すように届いた文章の、語尾にちいさな違和感を覚えた。

……過去形？

もしかと思って視線を上げる。

と、商店街の先、道向こうのコンビニの軒先に、他ならぬ彼女の姿をみつけた。

こちらに向かって、遠慮がちに手を振っている。

驚いて目を丸くしていると、再び携帯電話が震えた。

《やっと気付いてくれました？》

《え、え？ いつから？》

《最初からです。お仕事、お疲れさまでしたって打ったのも神保さんがここから見えたからですよ》

《気付かなかった……》

横断歩道の信号が青に変わって、歩行者が流れはじめる。

僕は強い衝動にかき立てられ、傘をさすのも忘れて一気に走り出した。

深いことは考えられなかった。一分一秒でも早く、側に行きたいと思った。

《もう、風邪引いちゃいますよ》

辿り着いた僕の額にハンカチを押し当てて、困ったように笑う。本当にいつかちゃんだ。もしかしてずっと待っていてくれたのだろうか。

無言の疑問に答えるように、彼女はメールを打ち込み始めた。

《今日は遅くなるって聞いてたから、そろそろかなって。残業の後、スーパーに寄ってから来たんです》

《スーパー？》

《ごはん、一緒に食べませんか。これ、天の川にしましょう》

差し出されたエコバッグには、そうめんと黄色いパプリカ、そして星形の抜き型が入っている。

これから作るのだろうか。どこで？ まさか僕のうちで？ もう21時なのに？

いろいろ思うところはあったけれど、僕はもう、考えるのをやめた。

傘を広げて、そこに彼女を招き入れる。

すぐに離れなければならぬとしても、この手をとらずにはいられないとわかったから。

《うん、かわいいね》

《でしょ？》

《いつかちゃんが、だよ》

多分、彦星だって渡るだろう。

雨が降っていたって、信号さえ青になれば。

* 星祭り、雨宿り（ほしまつり、あまやどり） f i n : *

次点の憂鬱

「し、城さんがそんなにバカだったなんて思いませんでした……っ」

泣いているのか怒っているのか、困っているのか喜んでいるのか、よくわからない顔を真っ赤にして彼女は言う。

「僕も同感だ」

自ら絶望的状况を招いてしまった。

それなのに僕は、彼女の涙が水元くんの前にさらされて良かった、と、それだけをひたすら安堵していた。

「自分から振られてどうするんですか。小野原さんのこと、好きだと言ってたくせに」

「君だって同じだろう。どうして断らなかった。こんな仕事」

君はどうして傷ついたがるのだろう。

僕はどうしてこんなに必死になって、君を護ろうしているのだろう。

「どうしてだよ」

強引に抱き寄せると、重い機材を運び慣れているはずの肩は思っていた以上に華奢だった。

「僕は君が君を大切にしないのが気に入らない」

「し、城さ——」

「僕ならもっと大切にするのに」

誰より、一番、大切にするのに。

「そんなに乱暴に扱うなら、……僕のものにしてやる」

しろ・あきな
城秋也、というのが僕のフルネームだ。

秋也、は中原中也に傾倒している父が、『空しき秋』の秋と、中也の也を組み合わせてつくった名前。

両親の教育がそうだったわけではないけれど、幼い頃から一貫して、僕は“頂点”というものを愛していた。

つまり一番だ。

範囲は狭ければ狭いほどいい。

座右の銘は、鶏口となるも牛後となるなかれ、だ。

小学生の頃からクラス委員長は常、しかし生徒会長を目指したことはない。

高校受験も自分の偏差値よりいくらか低いレベルを選んだお陰で、首席合格を果たした。

そこへきて近所にある某美術大学の芸術学部をわざわざ受験したのは、叔父が日本画家だったこともあり、コネクションの宝庫だったからだ。

ここでなら趣味と実益が兼ねられる。頂点が取れる。僕の人生設

計は完璧だ。そう思った。

だがしかし、現実には甘くなどなかった。

「城くん、あの、これ」

振り向けば、可憐な女子学生が僕に向かって手作りクッキーを差し出している。

ここでぬか喜びをしてはいけない。僕はそれを、入学してからの三週間で嫌というほど思い知っていた。

「これ、神保くんに渡してもらえないかな」

こうなるからだ。

今は素直に尊敬しているし、克之のことは親友だと思っている。けれどあのころ、自分のはるか上を行く天才の存在は、正直目の上のたんこぶだった。

克之は年少のころから秀でた偉才の持ち主で、絵を描けば数百万の高値がつくし、デザインならばヒットは確実で——さらにそのマスクの秀麗さといったら、僕の比ではなかった。

ちやほやされているのが気に入らなくて、僕は克之を冷たくあしらいつづけた。

「城くんって近所なんだ？ 今度遊びに行ってもいいかなあ」

こちらの嫉妬心を煽るように、彼はいつも少年のような笑みを浮かべていた。

「冗談じゃない。どうして僕が君を招かなきゃならない」

「どうしても駄目？ 城くんの作品面白いし、僕、いろいろ話したいなと思う……」

「断る。女子ならまだしも、男を部屋に連れ込む趣味はないね」

だから僕は、彼の本音に長いこと気付かなかったのだ。

あれは某テレビ局主催のビエンナーレを控えた秋のことだった。ちなみにビエンナーレというのは“二年ごと”という意味で、隔年に開催される展覧会のことを言う。

克之はそこで、招待作家としてメインスペースを飾ることになっていたのだが。

「駄目なところ、言ってもらえないかな」

克之は僕を作業室に呼びつけて、縋るような目でそう問うた。イーゼルには完成間近の油絵が乗っている。どうやら、批評をして欲しいようだった。どうして僕が。

一瞬、バカにされているのかと思った。

しかし、そっちがそのつもりなら、こちらだって全力でバカにしかえしてやろう。そんな意地悪な考えが頭をもたげた。

「静物ねえ、ありきたりだよ。モチーフが良くないんじゃないの。神保くんはもつと、子供っぽいものを描いていたほうがお似合いだと思うけど。いちから描き直したら？」

言いたい放題こき下ろした僕を前に、克之は安堵したように肩の力を抜いた。

「……ありがとう」

そうして、やつれた顔で情けなく笑ったかと思うと、大粒の涙をこぼしたのだ。

「は!？」

焦ってしまった。

悪いのは僕か。そうなんだろうな。言い過ぎたのか。いや、だが、礼を言ってから泣く奴があるか。

誰かが見ていたらどう言い訳しよう、と思わず背後を振り返ってしまった。

彼の作業場は個室だったから、第三者がいるはずなどなかったのだが。

「……ひさしぶりなんだ。こんな、本音で批評してもらったの」

「おまえ……」

「ありがとう、城くん。ありがとう」

克之は孤独だった。立場が確立しすぎていたからだろう。

周囲の人間はすでに、彼の作品にケチを付けることなど恐ろしくて出来なくなっていたのだ。

孤高の天才、というのはこういう奴のことを言うのだろうと思った。

僕は何故か、頂点で立ち竦む克之がいたたまれなくなってしまうた。

狭い範囲でのみ、一番を目指して来た自分。

それは、転落したところで致命傷を負わない高さだとわかっていたからだ。だから、簡単に傾斜を登れた。

なのにこいつは勝手に担ぎ上げられて、とてつもない高さに怯えている。

「なんだよ。そんなにバカにされたいなら、いつだってしてやるよ」
僕と克之はこの日を境に、親友になった。
こいつの下になら、いてもいいと思った。

そうして迎えた春、僕は克之とふたりでデザイン事務所『人望舎』を立ち上げた。

とはいえ当時の活動はサークルの延長のようなもので、ビジネスらしいビジネスとは到底言い難かった。

それでも僕の目的は半分達成されたようなものだった。

もともと克之は、作品依頼が殺到しても仕事を選ばないし、金銭のやり取りが何より苦手で、危なっかしかった。

だからそれらを僕が代わってやって、克之には作品づくりに没頭できる環境を与えてやりたかったのだ。

なにしろ僕が唯一認めた男なのだ。

もっともっと、登りつめてもらわなければ困る。

いや、僕がいたから頂点に辿り着けたのだと、いずれはそう言ってもらいたい。

次の年、新入生の船橋譲をブレインとしてスカウトしたのは、発想が群を抜いて変だったからだ。

個性は時に珍味となるし、克之にとってもいい刺激になると思ったのだ。

人望舎のメンバーは徐々に増えていった。そのたび、克之はよく笑うようになった。以前の薄い笑みではなくて、年相応の馬鹿笑いで、だ。

よかった、と心から言えた。

だから、僕は自らが頂点を目指すことをやめたのだ。

デザイナーズラボから、取材のオファーが舞い込んで来たのは僕らが大学を卒業した年の夏だった。

デザイナーズラボというのは割と玄人向けのデザイン誌で、人望舎のオフィスにも常に新しいものを置いている。

要するに憧れの雑誌からの思ってもみないオファーだったのだ。

僕は乗り気だった。

しかし、珍しく克之が渋った。彼には譲れないポリシーがあったからだ。

仕事は仕事として評価されるべきで、見た目や人となりが加味されるべきではない、と。

無駄に整ったルックスのことばかり取りざたされてきた克之にとつては、これ以上の露出は避けたいところだったのだろう。

気持ちはわからないでもない。

けれど大所帯の事務所を切り盛りしている僕の立場からすれば、それは清らかな理想論だった。

「じゃあさ、俺らもカッコ付けたらいいんじゃない？ 克之が霞むくらい。それならいいしょ」

変人・船橋はそう言ってのけた。

「……それ、根本的な解決とは言えない気がするけど」

「いいじゃんいいじゃん。克之はさ、俺らが騒がれることで存在感うすくなるから大丈夫」

「そうかなあ」

「そうそう。あー、俺が一番モテたらどうすっかな」

「おいコラ、おまえに一番は譲らないぞ」

「ほら、城も乗り気だし」

「いや僕はべつにモテたいとかいうわけじゃ」

「うーん、じゃあ今回だけだよ？ 今後は絶対に出ないよ？」

こうして、一度きりという約束で取材が入ることになったのだ。た。

そう、最初はこれっきりのつもりだった。一度の掲載が付加価値になって、客単価が上がれば、とそれくらいの気持ちだったのだ。まさかその記事で人気に火がついて、オファーが殺到することになるなんて僕は夢にも思わなかった。

最初のうちは、大量に舞い込んだ仕事を振り分けるだけで手一杯だった。

なにしろ大人数のスケジュールを日々作り替えていかねばならぬのだ。余裕なんて一切無かった。

睡眠時間も取れるか取れないかギリギリのところ、食事が喉を通らない状態にまで陥ったりもした。

体重が五キロ落ちたところで、見兼ねた克之が雑務を少し肩代わりしてくれ、ようやく少しの安息がおとずれた。そう思ったのだが。

「取材、もう入れないんじゃないのか！？」

「うん。そのつもりだったんだけどね、どうしてもってお願いされたら断りきれなくなっちゃって……ごめんね。僕、城に迷惑かけてばっかりだよ……」

「いや、克之が言いって言うなら僕は別にかまわないけど」

「……きらいになった？」

「なるわけないじゃないか！」

「そっか。良かったー」

油断した隙に、それまで断り続けていたデザイナーズラボでの連載企画が決まってしまったのだ。心優しい克之に電話番号を頼むなんて迂闊だった。

しかし、これを機に克之がメディアへの抵抗を無くしてくれたから結果的には良かったと言える。

連載は五年続いた。意外に長寿企画だったと思う。

彼女のとの出会いも、そのうちのひとつだったのだ。

新しい担当カメラマンとして彼女を紹介されたのは、神保が例の交通事故に遭う直前のことだった。

「都築佐奈つぎ・さなです。今号からお世話になります！」

カメラマンとして駆け出しだった彼女は、一言でいえば快活な女の子だった。

常に元気の塊といった感じで、気取ったところもないし、仕事に対して責任感がある。好感度は高かった。

僕は彼女を見るにつけ、こんな妹がいたら楽しいだろうなと思っただものだった。

そう、妹だ。それ以上でも、以下でもない。当然、邪な感情を抱いたことなんて一度もなかった。

ともあれ連載は好評のうちに幕を閉じ、人望舎にはそれまでより少し穏やかな日々がやってきたのだった。

そんな折りだ。克之の身に、突如不幸が襲い掛かったのは。

「城ッ、今、克之の親父から電話があつて。克之が、克之が……っ」

電話を受けたのは船橋で、直後、彼は縋るようにして僕の体を揺さぶった。

「こ、交通事故で瀕死の重体だって……！」

目の前が真っ暗になった。

高校の同窓会へ出席すると言って、克之が仙台へ帰省したのはついおとといのこと。

すぐ帰るから、データはデスクトップにあるからと笑顔で出て行ったのに。

交通事故？ 重体だって？ 嘘だろう。

急ぎ新幹線に飛び乗った僕はもう、恐怖のあまり膝が震えて直立出来ないほどだった。

克之は僕の夢。僕の未来そのものだ。

もし失ったら。克之がいなくなったら僕はこの先どう生きたい？

しかし本当に絶望したのはその後だった。

克之は辛くも命を取り留めたものの、耳に酷いダメージを負い、音を失っていたのだ。

職場に復帰してからも常に何かに怯えている様子で、一日に一度は酷く塞ぎ込むし、以前のような笑顔は見られなくなった。

言葉も交わせない。何を考えているのかもわからない。人望舎は電気を消したかのように、全体が暗くなった。

いつしか彼は、周囲とのコミュニケーションを厭うように、マスクで顔を覆いはじめた。

そうして、仕事を辞める、とまで言い出したのだ。

僕はまるで、自分のやってきたことが全て否定されているかのよう
に思えた。

人望舎を立ち上げたのは、克之のためだった。
自由に創作出来る場を与えているつもりだった。
もっと昇りつめてもらいたかった。

だから、担ぎ上げられて戸惑う彼を、更なる高みに押し上げ続
けた。

ああ、きつと。

僕は克之の才能にぶら下がりがったのだ。

自分の才能だけでは成し遂げられないことを、彼の力で達成しよ
うとしただけなのだ。

だとしたらなんて狡い――。

こんな奴につけ込まれて、克之はどれだけ迷惑しただろう。
そのうえ何故、あんな目に遭わされなければならない？

悪いのは僕じゃないか。

僕だ。事故に遭わなければならなかったのも、音を失わなければ
ならなかったのも、僕のほうじゃないか。

才能ある彼が消えるより、狡い僕が消えたほうが、世の中のため
にもなるじゃないか。

「……なんでだよ……」

ラテのカップを握りつぶす勢いで掴んだ僕は、自分がカフェにい
る理由を忘れていた。

彼女に―― 都築さんに肩を叩かれて、はっと我に返った。

そうだ。僕は彼女を呼び出したのだ。

「城さん」

大丈夫ですか、と彼女はポケットティッシュを差し出してくれたけれど、断って自分のハンカチを出した。

いつの間に泣いていたのだろう。

気の毒そうに眉を寄せた彼女に、僕は平静を装って経過の報告をした。

克之の耳の状態は、本人の希望でメディアに箝口令をしているのだが、中でも彼女はまめに連絡をくれ、常に気にかけてくれた。

だから、一番に伝えなければと思ったのだ。

「人望舎、解体するかもしれない」

「そんなに悪いんですか、神保さん」

「……精神的にはもう限界みたいだ」

僕も。

俯いて両手を握り合わせると、ふいにあたたかなものがその上に被さった。

思わず顔をあげると、都築さんは泣き出す一歩手前、といった表情で僕を見ていた。

「神保さんのこと、すごく大切なんですね」

華奢な手から伝わる体温が、力強かった。

「信じてあげてください」

「え……」

「大切なら、無条件で信じてください。でなければ、きっと後悔します」

難しいかもしれませんが、と口角を上げた都築さんは、どこか苦しそうだった。

その顔を見ていたら、こちらのほうが耐えきれなくなった。

僕は祈るように、その細い腕に縋って泣いた。

人目も気にせず、激しく嗚咽を漏らして泣いた。

「……後悔、しないでください。私みたいに……」

その言葉が意味するところを僕が知るのは、もう少し後のことだ。思えば僕はこれまでの人生の中で、あの時ほど誰かを頼もしいと感じたことはなかった。

彼女の言う通り、克之は人望舎に戻って来た。

本宮さんという理解者を得て、以前よりずっと強くなって、戻って来たのだ。

手掛けていた仕事を「勝ちにいきたい」と言われた時は倒れるかと思うほど嬉しかった。

この一件がきっかけで僕と都築さんは個人的に会うようになったのだが、もう、彼女は妹には見えなかった。

言ってみれば五分、対等に思えたのだ。

会ったび僕は、時を忘れた。こんなに過ごしやすい相手は他にいなかった。

だから小野原さんへの恋心が芽生えた時も、いちはやく報告したのだ。

彼女はトレードマークのショートボブを揺らして相づちを打ちながら、興奮気味に話を聞いてくれた。

「素敵な人ですね。小野原さん、私も会ってみたいです!」

「だろう。あの人といたら、僕も船橋もいろいろと勉強になると思う。自分を、高めてもらえるような気がするんだ」

「城さんならきつとうまくいきます。頑張ってくださいね!」

彼女にそう言われると、何だつてうまくいくような気がした。

例えば宇宙にだって行けるような気がしたのだ。

彼女さえ出来る、と言ってくれたなら。

「ありがとう。都築さんこそ、そろそろ彼氏を作ったほうがいいんじゃないか」

茶化して言うと、余計なお世話です、といじけてしまったが。

《城つてさ、本当に一番が好きだよねえ》

翌週の始め、仕事のスケジュールの打ち合わせが終わった直後に克之がそんなことを言った。

言った、といつてももちろん声に出して言ったわけではなくて、作業中のパソコンに打ち込んだ、というのが正しい。

例の事故以来、仕事場ではこれが僕らのコミュニケーション手段となっている。

つまり現在、タイピングの音こそが克之の“声”なのだ。

僕は克之の“声”が好きだ。タッチが速いからだろうが、雨音みたいに聞こえる。聞いていると凄く落ち着く。

以前の、囁くような優しい声も好きだったけれど、今の“声”のほうは何十倍も好きだ。

気を遣ってるの？なんて言われそうだから、本人には伝えていないけれど。

《もちろん。今回の仕事は市場への挑戦なんだ。負ける訳にはいかないだろ》

《うん、そうだね》

克之はちらと僕を見、再び続きを打ち込む。

《なのに、不思議なんだよねえ》

《何が》

《そんなに一番が好きな城がさ、小野原さんの一番になりたがらないこと》

そんなことはない。

返事を打とうとした手は、意志に反して止まった。

彼女の一番になりたい、そう思っではいるが。だが、奪取する気があるかと聞かれればそうでもない。

何故だ？

隙をみて、克之はさらに続ける。

《船橋は勇気がなくてひとりで行けないって言ってたけど、城はそうじゃないよね？ どうして抜け駆けしようとしらないの》

《だってそんなこと、男らしくないだろう》

《えー、僕ならいつかちゃんのこと、抜け駆けしてでも死守するけ

どなあ》

いつかちゃん、というのは克之の彼女—— 本宮さんのことだ。
ここだけの話だけれど本宮さんは、奥手な彼の初めての彼女だ。

《それに小野原さんって、男だとか女だとか、そういうの気にしない人だと思ったけど……》

その通りだ。ぐうの音も出なかった。

半日考えても答えは出ず、作業に熱中した僕はその疑問をいつの間にか忘れてしまった。

午後一番は新企画を持ち込んだばかりの、デザイナーズラボとの打ち合わせだ。

出版社に向かうと、編集部の村井さんの横に浮かない顔の都築さんがいた。

具合でも悪いのだろうか。

時々見せてくれる笑顔も何故だか今にも剥がれ落ちそうで、気になつてたまらなかった。

だから会議を終えたとき、僕はすかさず彼女を夕食に誘ったのだ。

「仕事、何かあったのか」

行きつけの寿司屋で赤身を三貫頼張った後尋ねると、彼女は諦めたように笑った。

「……半分正解です。どうしてわかるんですか」

「さあ。どうしてだろう」

わかりたいと思っているからだろうか。

「もう、全部やめちゃおうかなあって思っていました」

「ええ？」

「才能ないし、それでも頑張っていく理由、なくなっちゃったし……」

湯のみを握りしめる手はあの日と同じく、とても細い。僕の半分くらいしかない。

このときばかりは、頼りないな、と思った。

「才能？　ないわけないだろう。君は現にカメラで立派に食べているわけだし」

「そういうのじゃなくて。私にはもう、自分に出来る限界が見えちゃってるっていうか」

「先が見えるってことは、ちゃんとその道の上にいるってことだろ」「そう、ですけど。けど、行き止まりだってわかって進むメリツトなんてあるんでしょうか」

カウンター越しに、親父に大トロをふたつずつ頼んだ。都築さんがお茶しか口にしていなかったからだ。

「僕は、諦めたから人望舎を作ったんだ」

「……城さんが？」

「そう。僕には克之のような、突き抜けた才能はないからね。その点、君のほうが独り立ちしている分凄じくないか。僕は都築さんを純粹に尊敬してる」

上手に慰めたと思ったのに、彼女は涙ぐんで俯いてしまった。

「私、……そんなふうに言ってもらえる人間じゃないです」

狡い人間なんです、と言った声は消え入りそうなくらい細かった。

「卑怯なんです。私、自分から裏切ったくせに、今も同じ夢、追ってるんじゃないかとか、バカみたいなこと考えて」

何を言っているのだろう。

「だから再会さえできたらって、その日まで頑張っていればいつかやり直せるんじゃないかって、夢と恋愛、混同して追いかけてた。…都合、良すぎますよね」

恋愛？ だれか想う男がいるのか。

しかしこんなときに限って喉の奥が貼り付いていて、聞けなかった。

嫌な気分だ。吐きそうだ。

「だけでもうだめ。あんなに素敵な人が相手だなんて、…城さんでさえ夢中になるひとだもの、…勝ち目、ない」

僕が夢中に？ 小野原さんのことか？ じゃあつまり。

わかった途端、腑を握りつぶされたような感覚に陥った。

目の前に置かれた寿司が、ちつとも旨そうに見えない。

「まさか、君、み、水元くんのこと」

好きだと言わないよな。

「はい。高校のとき、付き合ってた。だけど私、彼のこと、信じられなくなっ、疑って、…裏切って。酷い、女なんです」

彼女はついに落涙し、涼しいはずなのに僕は汗をかいていた。
小野原さんが水元くんと付き合っている、と聞かされた時よりずっとシヨックだった。

「だけど、ずっと忘れられなくて。毎日、毎日好きだった……」

信じる、って。

あのときああ言ってくれたのは、そんな過去があったからなのか――。

寿司屋の店主がぎょつとした様子で彼女の涙を見ていた。

見るな、と思った。僕以外誰も見るな。あつちを向け。見せたくない。

咄嗟に、手に持っていたスーツのジャケットを彼女の頭から被せた。

「君が卑怯者なら、僕はもつと卑怯だ」

「え？」

「親友を利用して夢を追ってる。僕は克之にぶら下がりっぱなしなんだ。狡いだろう」

言って煎茶をすすった。眼鏡が曇った。

「……そんなことないです。だって事故のとき、城さん、泣いてたじゃないですか。神保さんのことすごく大切なんだって感じました」

「泣いているのは君も同じだ。後悔しているんだろ」

「だ、だけど、私は酷い女だから城さんとは違……」

「違わない。本当に酷い人間はそんな顔をして泣かない」

噛み合わない会話が酷くもどかかった。

何を言っても無駄のような気がして、僕は素早く勘定を済ませた。

「行くぞ」

奪うように手首を掴む。か細いそれは涙に濡れて湿っている。痛々しくて、苛々して、僕はつい声を荒げた。

「早く！」

「え、え？」

「スカツとするところに連れてってやる」

店の外には、うつすらグレーがかった空が広がっていた。

人目を避けて細い路地に入ってから、船橋に電話を掛ける。

×切あけで予定のない彼は、寝ぼけた声でもしもと出た。

『何だよー。急ぎの仕事なら他にやってくれー』

「違う。今すぐ林ビルの広報に連絡を取ってくれ。おまえが一番親しいだろう」

『ハア？ いいけど、なんでまた』

「いいから。今日のナイト上映の予約席、接待で使いたいから二席融通きかせてくれって伝えてもらえないか」

『ん、わかった。でもあそこ、通常より割高だし全席カップルシートっしょ？』

「それでいいんだよっ」

怒鳴るなり切った。あそこは懇意にしているから多分大丈夫だ

ろう。

「あ、あの、城さ、どこへ——」

「映画館」

「……は？ な、なんで」

泣くなら声を上げて思い切り泣けばいい、とは、小声で付け足した。聞こえていなかったかもしれないが。

そうだ、泣けばいい。きつとすすきりする。

だけどその顔を、他の誰かには見せたくない。ひとりにもさせたくない。

だから僕のすぐ隣で、僕だけが届く位置で、気が済むまで泣けばいいんだ。

もう大丈夫だ、ってしつこいくらい言ってる。

嫌がられたって、笑えるまで付き合ってる。

(……だからその間は、他の男のことなんか考えるなよ)

都築さんは不思議そうにしていたけれど、大人しく着いて来た。

アクション映画ばかり三本続けて観て、途中、そろって居眠りをして、気付けば朝だった。

僕は繋いだ手を離さなかった。席を立っても、戻ってくれば再びしっかりと握り合わせた。

そうしてその度、心の中でもう大丈夫だよ、と唱えた。

翌朝、真っ赤な目をして朝日を拝んだ彼女は、少し恥ずかしそうに笑って。

僕はそれを心から可愛いなと思って、誇らしいような、くすぐったいような気分になったのだった。

小野原さんが水元さんと正式に婚約した、と聞いたのはその直後のことだった。

ふたりは簡単なホームパーティーを催すらしく、克之のところに本宮さんが招待状を持って来たのだ。

その事実を知った船橋は一日の無断欠勤を経て、翌朝、泣きはらした顔で出勤して来た。

「おばようー、うへへへ」

「臭ッ、おまえ酔ってるな！？　それで仕事になるのかよっ」

「っ、つめたいな！　振られた者同士、慰め合おうって気がないのかよっ」

「冗談じゃない。僕はちゃんと昨日も休まず仕事をしたぞ」

「……なんだよ、好きな女に振られたのにやけに冷静じゃんか、城」

言う通りだ。

何故だか僕は、自棄になった船橋をどこか冷静に見ていて、だからショックを受けたかといえさほどもなかったのだと思う。

半分、他人事みたいだった。いや、そんなことより僕は、都築さんがどうしているかが気になっていた。

「でもよお、こうなったら最後のチャンスにかけるしかないよな。

ホームパーティー、乗り込むぜ俺。城も行くだろ」

「なんで僕が」

「あのなあ、好きなんだろ。このままじゃ諦めきれねえだろうが」

そう、だろうか。確かに最初のうちはそう思っていたような気がするが――。

「だったらこう、バーンと劇的に告白してさ、皆の前で奪って逃げんだよ。女王様をさ」

「は」

「おまえも来いよ。でないと後悔するぜ」

乗り気ではなかった。しかし、そこまで言われてむぎむぎ引き下がるのもおかしいように思えて、僕は克之からパーティーの日時を聞き出したのだった。

翌週の土曜。

色々な意味で、この日が僕のターニングポイントとなった。

パーティーは品川の住宅街、瀟洒な庭付き一軒家で行われていた。僕と船橋は、克之の手引きで庭での立食に辛くも潜入できたのだが、予想以上の豪華な顔ぶれにまず気圧されてしまったのだった。

「お、おい城、あれって奥沢華子じゃねえ？ 食品会社のＣＩを軒並み手掛けた、あの」

「ああ、結婚して一線を退くって聞いたけど、まさか妊娠中だとは隣にいるのは旦那さんか？ うわ、あっちにも知ってる顔がいるぞ。確かヒロサワ……広沢美樹とかいう、アパレル関連の」

そこへきて我らが神保克之が出席しているのだ。贅沢なんてもんじゃない。

見知った企業のお偉い方がひっきりなしに訪れては帰って行く様などまさに圧巻といった感じで。

僕は小野原さんの経営手腕に脱帽せざるを得なかった。

「すごいな小野原さん」

ため息まじりで漏らした船橋も、雰囲気完全に飲まれてしまっているみたいだ。

抱えた薔薇の花束でさえ、色を失って見える。

反して小野原さんは人の輪の中心で、艶やかに笑っていた。

「どうやったらこんな人脈が築けるんだ。ハンパねえよ、あの人のバイタリティー」

「だな。それなりに辛酸も舐めて来ただろうが」

「……それを、水元くんはずっと側で支えて来たんだなあ」

それきり船橋は黙って、芝生の上に座り込んでしまったのだった。気の毒なくらい悄然としていたから、しばらくは一緒にいてやった。

そのときだった。デザイナーズラボの村井さんが、都築さんを連れて玄関に現れたのは。

目を疑ってしまった。どうして彼女がここに。

「わあ、人望舎の方もお揃いで。豪華な顔ぶれですねえ」

村井さんは興奮気味に話しかけてくる。

僕は都築さんの首から下がるニコンの一眼レフに気付き、もしか、と思わず口元を覆った。

取材が入るのか。彼女が撮るのか。

しあわせそうなふたりを？——馬鹿なことを。

「……こんにちは。城さん、この間はありがとうございました」

小さく下げた頭に、頼りない形のつむじが見えたら胸が破けそう

に痛んだ。

ちつとも笑えていないじゃないか。なのに何故、取り繕うように笑おうとするんだ。

たまらなかった。

咄嗟に掴んでいた船橋の襟元を離し、その手で奪うように都築さんの手をとる。

「——小野原さんッ」

振り向き様に呼ぶと、女王様は人垣の向こうでわずかに顔を上げた。

「あら、来てたの」

幸せが滲み出ているせいだろうか、普段に輪をかけて美しいと思う。

けれど、その視線より彼女に触れている右手のほうがずっと熱かった。

「すみませんっ、撮影は船橋にやらせてください。この子、僕との先約があるので!」

叫んで、都築さんのカメラを船橋の腹の上に乗せる。

別にいいけど、と言った小野原さんは同時に彼女の存在にも気付いた様子で、申し訳なさそうに口角を上げた。

「アンタ、案外いい男よね」

知っているのだろう。この子が水元くんの元彼女であることを。違う、と思った。

別にあなたに気を遣ったわけじゃあない。邪魔者を排除しようとしているわけじゃあない。

僕は、僕はただ――。

「……それ、都築さんに言っただけでやってください。何度口説いても上手くかわされてしまっただけ」

「し、城さん、何を」

「実を言うと、今日も仕事があるからと誘いを断られてまして。しかしまさかここに来るとは」

嘘八百だった。

焦る彼女を無理矢理抱き上げた途端、会場内の女性達が揃ってきやあつと甲高い声を上げる。

「この子は僕が有り難く頂いて帰ります。村井さん、穴埋めはあとでさせてください」

「や、ヤダ、下ろしてくださいっ」

「断る。――では失礼」

去り際に水元くんに一瞥をくると、僕は彼女を担いだまま早足で門を出た。

自分でも衝動的なことをしたなと思う。それでも止められなかった。

しばらく行ったところで体を下ろすと、開口一番、彼女は僕を責めた。

「なんてことしてるんですか。し、城さんがそんなにバカだったなんて思いませんでした……っ」

泣いているのか怒っているのか、困っているのか喜んでいいのか、

よくわからない顔を真つ赤にして。

あちらが興奮していると、こちらは冷静になってくるから不思議だった。

「僕も同感だ」

自ら絶望的状况を招いてしまった。

それなのに僕は、彼女の涙が水元くんの前にさらされなくて良かった、と、それだけをひたすら安堵していた。

「自分から振られてどうするんですか。小野原さんのこと、好きだって言つてたくせに」

「君だつて同じだろう。どうして断らなかった。こんな仕事」

「私が断れるほどの立場だと思つてゐるんですか」

「そんなことを言つてゐるんじゃない。君はもつと自分をいたわつたほうがいい。休暇だつて必要だろう」

小さく息をつく、彼女はきゅつと唇を噛んでから感情的に吐き出した。

「女だから？ そのうち仕事なんてやめて家庭に入るかもしれないから？ だからいい加減でいいつて言うの」

「違う。いい加減にしるなんて言つてない。君、この間と言つてゐることが違うじゃないか。やめてしまいたいとか、行き詰まつてゐるとか、あれは何だったんだ！」

「それはっ」

矢継ぎ早の言い争いが続いた。僕は苛々していた。これまでで一番苛々していた。

「それは、だって、城さんが尊敬してるって言うてくれたから。だから私——」

「僕の所為なのか」

「ちがう、そうじゃなくて、私はっ……」

涙目でじつと見上げられて、身動きが取れなくなる。縋るような瞳だった。

「私、私は、」

「卑怯だから、だから傷ついてもいいって言っのか」

「違うってば！」

「……どうしてわからないんだ。僕は、それでも君を、」

君を—— 何だ。

「どうしてだよ」

どうしてこんなにやりきれない気持ちにさせられるんだ。

強引に抱き寄せると、重い機材を運び慣れているはずの肩は思っていた以上に華奢だった。

こんなに傷つきやすいくせに。傷ついているくせに。

無理に平気な顔をしようとするなよ。

もっと僕を頼ってくれよ。

「僕は君が君を大切にしないのが気に入らない」

「し、城さ——」

「僕ならもっと大切にするのに」

誰より、一番、大切にするのに。

「そんなに乱暴に扱うなら、……僕のものにしてやる」

君を大切にしたい。誰よりも大切にしたい。僕だけが大切にしたい。

けれど彼女は僕の胸をぐいと押し戻し、

「同情ならやめてください」

涙声で絞り出すように言った。

「……もう、まどわせないで」

「え……？」

「あっちが駄目ならこっち、とか、それじゃあの時と同じ……。そんな卑怯な自分、嫌いなんです。大嫌いなんです」

「つ、都築さん」

「私、城さんに大切にしてもらえるほど価値のある女じゃない。本当のこと知ったらきつと嫌いになる。だから——」

——もう、逢わないことにしましょう。

そうして彼女は足早に去って行った。

晴天の空の下、取り残された僕は、茫然としながらもあっけない終わりを悟った。

自分が掴みかかったものの正体も見極められないまま。

だから煮え切らないまま、結局僕は、それを失ってしまったのだ。

僕と船橋はそれから同時にやさぐれて、揃ってラブプラスにハマった。

当然のことだが仕事にはならなかった。

おかげで僕の営業成績は過去最低を記録して、褒美に克之から笑顔の蹴りを頂戴したのだった。

彼が笑顔で手を出す時は、怒りが頂点に達しているときだけだ。すなわち僕は最高の怒りをかった最低の男なのだった。

《君ら、それでいいの》

船橋は応接間の畳の上を芋虫のように這う。「寧々えー」情けない髭面で、二次元の恋人の名を呟き漏らしながら。

ちなみに僕のバーチャル嫁は凜子といい、ショートボブとオデコが可愛い年下の女の子である。

《仕事なら来週から復帰するよ》

先週と同じことを僕が打ち込むと、克之は呆れ返った顔で僕らを見下ろした。

《もう、そっちはいいよ。なんとか僕が切り盛りしてるから。そんなことよりふたりとも不本意そうにしちゃってさ。当たって砕けたわけでなし、どうしてそこまで腐るんだよ》

《ラブラブの克之に言われたくないしー。つつか俺は城の足下にも及ばない、チキンでヘタレな男ですよ》

船橋はPSPから会話に乱入してくる。彼は今、DSとPSPとiPhoneとPCを同時に弄っている。タコみたいだ。

《なんだよそれ》

《パーティーのとき、小野原さんにもいい男だとか言われちゃって

さあ、ム力つくから黙ってたけど、あのあと女性陣の話題を独占した罪は重いんだっ》

《ああ、確かにあれは僕も惚れ惚れしちゃったなあ》

褒められているのに溜息が漏れる。精神というよりもはや、体全体が鈍く重い気がした。

《でさ、やっぱりなって思ってたんだよね。やっぱり—— 小野原さんじゃなかったんだ、って》

《なにが》

《城にとって本当に大切な人》

全てを見切った笑顔で振り返ると、克之はおもむろにスケッチブックを取り出し、真っ白な紙にサインペンを走らせた。

《さて、ここで君らに最後の選択》

画面でなく紙に書いたのは、こちらに言葉を挟ませたくないからだろう。

《小野原さんと水元くんが大げんかをしたそうだよ》

えっ、と船橋は瞬時に体を起こした。

《どうする？》

どうする、って——。

僕は瞬間的に、都築さんの姿を脳裏に描く。

教えてやったほうがいいだろうか。恋敵を出し抜くチャンスだと。急ぎ携帯電話を求めポケットの中をまさぐる手はしかし、またも

や無意識のうちに勢いを失った。

駄目だ。卑怯をあれほど厭う彼女が、人の不幸を喜ぶはずがない。まして僕は、もう二度と逢わないと牽制された身なのだ。もはや電話にすら出てもらえる気がしない。

あの日—— 一体何を間違えたというのだろう。
考えるだに混乱して、僕はそのたび、疼く胸を押さえ途方に暮れる。

答えが……見つからない。

「俺、行く」

そう言っただけで不気味なほど静かに立ち上がったのは船橋だった。僕は焦って彼の腕を掴む。

「待て。行くってどこにだ」

「どこって、小野原さんのところに決まってるだろ」

「行ってどうするんだよ。この間もそんなこと言っただけ何も出来なかったじゃないか。性懲りもなく同じことを——」

「同じじゃねえよ！」

船橋は僕の手を振り払う。

「船ば……」

「止めんなッ、俺は行く！」

にこにこ笑ってこちらを見ている克之は、事の重大さに気付いているのかいないのか。

古びた玄関のブザーが場違いなほど甲高い音を立てたのはその時だ。

出る気にはなれなくて他のメンバーに対応を頼むと、数秒後、応

接間には意外な訪問者が顔を見せた。

「こんにちは。お久しぶりです、お邪魔します」

「み—— 水元くん！」

噂をすれば影、そこにいたのは紛う事無き小野原さんの婚約者だったのだ。

僕が背後の船橋を振り返ると、すでにそこに奴の姿はなかった。襖が十センチほど開いている。

行ったのだろうな、と思った。想い人のところへ、今度こそ、玉砕しに。

ジャージはきちんと着替えただろうか。無精髭は流石に剃ったほうがいいぞ。

そんなことが気になって、少し笑えた。

《わざわざ名指しで呼びつけちゃってごめんね》

そう書かれたスケッチブックの影で克之の右手が丸を作る。まさか謀ったのか。

《いえ。お仕事のお話だとか》

《うん、あのね、コラボ第二弾のマップが出来上がって来たからお渡ししようと思って》

《うわあ、今度も豪華なラインナップですねえ》

《でしょう。でも、本当はこれがメインじゃなくてね。本宮さんのことで聞きたいことがあるんだよね》

《いつちゃんの？》

水元くんは丸い目をさらに目を丸くする。

《うん。彼女、最近僕に隠してることがあるみたいで》

《隠してるってこと、ですか》

《そう。三週連続で週末のデートを断られたんだけど……何か言ってるかい？ 僕、怒らせるようなことしたかな》

《えーと……僕の口からは言えませんが。でも、怒ってはいないです。というより、神保さんのためだから必死なんだと思いますよ》

《必死？》

《ええ。毎週仙台まで通ってるんですから》

《仙台、ってどうして》

《もう少し待ってあげてください。僕からはこれしか言えません。すみません》

各々直筆で綴るふたりを見るに、メールかチャットでやりとりをしたほうがよほど早そうだった。

元来人が良くて他人を騙すなんて決してしない彼に謀略をそそのかしたのは、友情だろうか。

なら、僕は有り難く乗っかることにする。

「……水元くん、僕もひとつ聞いていいか」

彼はなんですか、と答えながら笑顔で僕を見返す。

「都築さんのことなんだが」

彼女にとっての『卑怯』の原点が何なのか、詳しく聞けたら思った。

しかし彼は、ああ、と頷いて、恐らく克之でも把握していなかった事実を——口にしたのだ。

「僕も昨日知りました。急ですよ、上海なんて」

「……は？」

「あれ？ その話じゃないんですか。佐奈ちゃ、いえ、都築さんが中国に行くっていう」

なんだって。

「ご存じ無かったですか、城さ——、え！？ ちょ、どこへ……！」

あとのことは、途切れ途切れの記憶しかない。

息切れをしながら最寄り駅のロータリーを突っ切ったとき、僕の胸はもう、焼き切れてしまいそうになっていた。

中国だって？ 冗談じゃない。

苦肉の策でデザイナーズラボの編集部に電話を掛け、彼女の居場所を乞うと、意外にもその場にいるとの回答が得られた。

同じビル内のスタジオで撮影が行われているとか。まったくの僥倖だ。

電車を待つ時間も惜しくて、タクシーに飛び乗る。

あとは目的地に至るまで、祈るように両手を組み合わせ心細さに震えた。

彼女のいない未来なんて、夢にも描けない。

どこへも行かないで欲しい。

力になりたいとか頼って欲しいなんて偉そうに思っていたのはどこの誰だ。

馬鹿だな。本当は彼女のためなんかじゃないだろ。

「え、し、城さんですか！？」

受付で待っていてくれた編集部の村井さんの第一声はそれだ。

ようやく僕はよれよれのジャージと髭面のままここまで来てしまったことに気付いた。

同じタイミングで、村井さんの背後に、三脚をかついだ目的の人物が姿を見せた。

逃げられるかな、と身構えた僕の前、彼女は落ち着いた様子で歩み寄って来て小さく頭を下げる。

「こんにちは、城さん」

「……都築さん」

「良かった。ちょうどお伺いしようと思っていたところなんです。私来週から中国に赴任することになって、それで」

こんなに近くに対峙しているのに、遠い。

「それで、お別れを言いに」

抱き締めてしまいたかった。

「どうして急に、……中国なんて」

ひとつ上の階に設けられている商談スペースに移動すると、気を遣ったのか、村井さんはお茶を入れてきますと言って席を外してくれた。

「僕があんなことをした所為か。迷惑、だったよな。……ごめん」

謝るから。だからどうにか留まってほしい。

本音が出かかったところで、都築さんが少し困ったような顔をし

て目を伏せたから、僕はぐつと続きを飲み込む。

この間の二の舞になるのはごめんだ。言い合いでなく、冷静に話し合いたい。

「迷惑どころか、むしろ逆なんです。私、嬉しかった。城さんが庇ってくれたこと、何年も片思いしてた人にやっと逢えたときより、夢が叶ったときより、ずっとずっと嬉しかった」

「なら、どうしてももう逢わないなんて」

「……引き返せなくなりそうで怖かったんです」

目を丸くした僕に何故かすみませんと謝って、彼女は言葉を繋げる。

「だけど、そう思うのは私が弱いからなんですよね」

そんなことはない。

途切れた台詞を飲み込むと、彼女は少し笑った。

「私、強くなりたくて。このまま、情けない女のままじゃ、城さんのこと……好きになる資格もないですから」

「え？」

「一年間、向こうでたっぷり修行してくるつもりです。自分に自信が持てるように。城さんが尊敬してるって言うてくれた、その言葉に、恥じない人間になれるように」

真っ直ぐにこちらへと向けられた視線は強い閃光のようで、僕は少し眉をひそめる。

ああ、もう引き止められないな、と思った。
そこに確固とした決意を見てしまったから。

「あの……写真、撮らせてもらっていいですか。お守りにしたいんです」

「嫌だよ」

嫌だよ、君と離ればなれになるのは。

「じゃあ髭を剃るまで待ちますから。ね」

「ひげ剃りがない。それに僕、ジャージだ」

襟元を引っ張りながら主張すると、都築さんは残念そうに、開きかけていたカメラバッグの蓋を閉めた。

「そのままで充分素敵なのになー」

「お世辞はいらない」

「本音ですよ。私、ずっと城さんに憧れてましたし」

「……僕？」

「そう。私、城さんみたいになりたくて」

「じ、神保じゃなくて？」

「どうして神保さんが出てくるんですか。関係ないでしょ」

やはり否定も肯定もできずに僕はただ沈黙を続ける。

「城さんは自力で自分の居場所を見つけて、誰のことも恨まず妬まず、自分のすべきことをきちんと全うしてる——とても潔い人」

過大評価だ。

強く唇を結んだけれど、それでも視界は緩く歪む。

「だから、私も。才能があるとかないとか、それだけじゃ掴めない何かを掴みたいんです」

複雑になりすぎた気持ちはないまぜになって押し寄せてきて、一粒、ついに溢れる。

それは手の甲に落ちて、身勝手な僕の本心を叩いた。本当はずっと、側にいて欲しいけれど。

「そうか。……気をつけて」

「な……泣かないください。で、伝染しちゃうから」

「すればいい。そうしたらその顔、君のカメラで撮って残してやるよ」

「意地悪」

「君が悪いんだ。苛めたくなる顔をしてる」

「……酷い。責任転嫁は私の十八番なのに」

「ふうん、自覚してるんだな」

「もちろん。だから自分を変えに行くんです。帰って来た時は生まれ変わって女神みたいになってる予定なんですからね」

「予定は未定だろ。そうそう上手くいくかよ」

「なにそれ、始める前から否定するなんて最低っ」

「最低結構。否定しない。僕こそ自覚症状はしっかりあるんでね。むしろ一年後、驚くのは君のほうだぞ」

「どついう意味ですか」

「僕こそ変わってやる。今度こそ、何が何でも僕の側を離れたいな。いつて君に言わせてやる」

「……え」

驚きのあまり表情を忘れたのだろう、口をぽかんと開け放った彼女の手を、テーブルの上で乱暴に掴んだ。

「——待ってる」

何年でも待つてる。ずっと待つてる。それは僕が今彼女に贈れる、最高で最上の、精一杯のエールだった。

照れ隠しでそっぱを向いたら、手を握り返されて、

「はい……」

引っ込んだはずの涙がまた蘇ってきた。

こうして彼女は翌週、上海へと飛び立って行った。

それはすなわち、僕の憂鬱が一年先まで続くことを意味したのだ
が。

彼女の残していったものならば、それもまた喜んで受け取れたの
だった。

……僕はマゾかもしれない。

旅行者なのか出張なのか—— 平日午前の成田空港は想像したよ
り人出が多く割に混雑していた。

かといって熱気が充満しているかといえはそうでもない。ないの
に。

僕は蒸されるような暑さと格闘し、あまつさえ比類無き忍耐をこ
の身に強いられていた。

これは紙袋をくれるといってくれた店員さんの親切を踏みにじっ
た報いだろうか。

「出迎えに花束なんてベタすぎたか……」

それも向日葵とか。（もう初冬なのに）

ジャケットを被せれば隠せないこともないと思うが、せつかく今
日のために仕立てたスーツを花束に着せるなんてとんだお笑いぐさ

だ。

だから僕は堂々と目立つ代物を抱える、傍目にはキザな男なのだった。

早く来てくれ都築さん。

都築さんが上海へ赴任してから一年。

僕らは時々メールと電話をする程度の仲で、彼女が帰省したときでも直接顔を合わせてはいない。

当然告白もしていないしされてもいない。

けれどお互いにお互いの気持ちはおよそ分かってしまっているという、実に曖昧で宙ぶらりんな関係なのだった。

「はい、シアオイ シアオー！（笑って）」

元気の良い声に振り返ると、そこには旅行者と思しき中国人の親子に向かってカメラを構えている、ワークパンツ姿の女性。

背格好からすぐに彼女だと分かった。

カメラが邪魔をして表情までは伺えないものの、流暢な中国語でコミュニケーションをとりながらシャッターを切る様は、潑刺として実に楽しげだ。

いい一年を過ごしたのだろう。

「あ、城さーんっ」

直後、こちらに気付いた彼女は大きく手を振りながら挨拶より先にカメラを構える。

当然、僕に体裁を取り繕う暇は与えられない。

向日葵を抱えた姿は動かぬ証拠とばかりにフィルムにおさめられてしまった。

「ただいま！」
「……おかえり」

充実していたようだねと聞いた僕に、はいもちろんと答えた彼女は憎らしいほど清々しい笑顔。
直視するのが躊躇われるくらい。

「楽しかったです。向こうの人達と別れるのが惜しかったくらい」
「ふうん」
「お土産も沢山頂いちゃいました」

少々不本意だなと思った。ほんのわずかに、だが。……いや、嘘だ。目一杯不本意だ。

「じゃあこれは余計だったな。帰国祝い、君に似合うと思ってわざわざシーズン外のものを取り寄せたんだが」
「えっ、本当ですか！ 私、ひまわり大好きなんです」

大好き、ねえ。
言う対象を間違えてないか。

「そうだな、じゃあこういうのはどうだ。君が上手におねだりできたらくれてやってもいい」

「な、なんでそうなるんです」
「妬かせるからだ」

「……もう、城さんってばすぐ人の所為にするとこ、変わってない」

一気にオデコまで真っ赤にしてぶつぶつ文句を言い始める彼女は、随分髪が伸びて女らしさが増したように思う。

人間性はお互いに大して進歩していないようだが、
が、関係性がこのまま、というのは困る。

「言いたい事はそれだけか」

隙をついてすくいあげるように抱き寄せると、その目は短い悲鳴
とともに驚きに見開かれた。

「きゃ！」

あとの表情はわからない。分からないほど、間近に迫ってから僕は
焦らすように囁いた。

「——欲しい？」

通行人に思う。見たければ見る、と。

こっちはもう、散々好奇の目に晒された挙げ句なのだ。

今更ハグが加わったくらいで羞恥の度合いはさして変わらない。

「言わないなら捨ててしまおうが」

「い、じわる……っ」

「語彙に進歩がないな」

「鬼畜！ サドメガネツ」

「幼稚。中国語はどうした」

「ちよっ、こ、こんな状態で言える訳な…、放してえ、城さんとい
ると恥ずかしい事ばかり……！」

必死の抵抗を試みる腕はやはり華奢で、けれど今までより圧倒的
な可能性を秘めている筈で——

僕はそれをとて誇らしく思いながら、上体をななめに屈めた。

「なら、もっと恥ずかしい事を教えてやる」

とん、と軽くぶつかる程度のキスをして、

向日葵が潰れるほど強く抱き締めたら、

不意打ちの仕返しを、君に。

「……好きだよ」

そして、憂鬱の終わりを、僕に。

< f i n . >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2869p/>

Peewee 外伝集

2011年8月15日08時13分発行